聖　書：Ⅱサムエル 17：1〜29
説教題：すぐれた助言を打ち破る主
日　時：2018 年 12 月 9 日（夕拝）

ダビデはこの 17 章で大ピンチに陥っています。彼は息子アブサロムが謀反を起こしたために都を追われて逃げている状況にあります。そのダビデを一層の窮地に追い込んだのは、彼の側近アヒトフェルがダビデを裏切ってアブサロムの側についたことでした。そのアヒトフェルについて 16 章 23 節にこう書かれていました。「当時、アヒトフェルの進言する助言は、人が神のことばを伺って得ることばのようであった。アヒトフェルの助言はすべて、ダビデにもアブサロムにもそのように思われた。」　そのアヒトフェルが 16 章でアブサロムに提案したことは、ダビデが残したそばめたちのところに入ることでした。一言で言えばハーレムの乗っ取りです。これによって、それまで態度を決めかねていたイスラエル人も、決心してアブサロムに付くようになるだろう。そのようにアヒトフェルは判断したのです。その彼がさらなる提案をこの 17 章でします。それは直ちにダビデを追いかけ、彼を討ちましょう！というものです。17 章 1〜2 節：「アヒトフェルはアブサロムに言った。「私に一万二千人を選ばせてください。私は今夜すぐに、ダビデの後を追い始めます。私は、彼が疲れて気力を失っている間に、彼を襲い、彼を震え上がらせます。彼と一緒にいるすべての民は逃げるでしょう。私は王だけを打ち殺します。」

アヒトフェルの考えは、ダビデは今、疲れて気力を失っているだろうから、一気に畳みかけましょう！というものです。そうすれば相手側はパニックに陥り、一気に崩れるに違いない。そして私はダビデ一人を狙う。彼さえ打ち殺せば他の者たちはみな従順になってアブサロムに付くだろう！というものです。アヒトフェルにはすべてのシナリオが見えているようです。4 節に「このことばは、アブサロムとイスラエルの全長老の気に入るところとなった。」とあります。

ところがです。アブサロムはどういうわけか、5 節で「アルキ人フシャイを呼び出し、彼の言うことも聞いてみよう」と言います。このフシャイはダビデの友としてダビデに仕えて来た人です。なぜそんな彼の意見など聞く必要があったでしょうか。アブサロムはアヒトフェルの提案が完璧でスルスルッと決まったので、少し違う意見も聞いてみたいと思ったのでしょうか。あるいはフシャイが何を述べるかを聞いて自分に対する彼の

忠誠度を試そうとしたのでしょうか。あるいは単なる気まぐれによったのでしょうか。詳しいことは書いてありませんが、このことが彼の命取りとなります。

さてフシャイとしては難しい立場に置かれています。彼としてはダビデのために何とか時間稼ぎをしなくてはなりません。しかしだからと言って、その魂胆が見え見えの提案をすることもできません。8 節以降に記されている彼の提案のポイントは次の通りです。一つ目はダビデはアヒトフェルが言うように疲れて気力を失っているどころか、子を奪われた雌熊のように気が荒くなっている。二つ目はダビデはベテランの軍人であって、ゲリラ戦には滅法強い。ダビデ一人を狙おうとしても、そう簡単にはうまく行かない。三つ目に、もしこちらの兵士たちが先に倒れたら、ダビデが勇士であることを知っているこちらの兵士たちは一気に心がしなえ、総崩れになる危険が高い。そして四つ目に急いで賭け事のような戦いに出るよりも、全イスラエルからおびただしい兵士たちを集め、圧倒的な勢力をもって確実に勝利するようにした方が賢明である。このように述べると 14 節でアブサロムもイスラエルの民も「アルキ人フシャイの助言は、アヒトフェルの助言よりも良い」と言います。こうして何とフシャイの意見が優先して取られることになったのです。なぜこんなことになったのでしょうか。フシャイの演説を見ると彼が賢くアピールしていることが分かります。2 つの点に注目したいと思います。一つはアブサロムの自尊心にうまくアピールしていることです。フシャイは 8 節で「あなたは父上とその部下が戦士であることをご存じです」と語り始めましたが、ここの「あなたは」という言葉は原文では強調されています。つまりフシャイは、他の人はともかく、アブサロム王、あなたならこのことを良く知っておられるはずです！という言い方をして、先のアヒトフェルの助言とは違う考え方をするように仕向けています。また 11 節では全イスラエルを「あなた」のところに集めて、「あなた自身」が戦いに出られますようにと言っています。アヒトフェルが勝利を勝ち取って来るよりも、アブサロムがイスラエル軍の中心にいて輝かしい勝利を得る方がカッコイイ！そういう彼の自尊心に見事にアピールしています。そしてもう一つは、フシャイの言葉は非常に巧みであることです。11 節で、全イスラエルを「海辺の砂のように数多くあなたのところに集めて」と言い、12 節ではダビデを見つけ次第、「露が地面に降りるように彼を襲うのです」と言います。13 節では「もし彼がどこかの町に入るなら、イスラエル中の者がその町に縄をかけ、その町を川まで引きずって行って、そこに一つの石ころも残らないようにしましょう」とも言います。こうしてフシャイは、おびただしい勢力による圧倒的な勝利の情景を眼前に描かせ、すでに勝負は決まったかのような表現をしています。その光景を

思い浮かべると感動でしびれてしまいそう。それでアブサロムもイスラエルの民も、フシャイの助言の方が良い！と声を合わせたのです。

しかしこの箇所は、アヒトフェルとフシャイの知恵比べでフシャイが上回ったということを言おうとしているのではありません。なぜアブサロムはフシャイの意見を取ったのでしょうか。それについては 14 節後半がはっきり説明しています。「これは、主がアブサロムにわざわいをもたらそうとして、主がアヒトフェルのすぐれた助言を打ち破ろうと定めておられたからである。」　すなわちこの出来事全体の背後にあって、すべてを導いておられたのは主なる神であったということです。人間の目には、二人の知恵者がそれぞれ意見を出して、フシャイが勝ったというだけのことのようです。神抜きでも説明がつきそうです。しかしそうではない。この事柄の背後にあって全体を導いておられたのは主なる神であった。この方が人間の目には隠れた形で力強くこの場を支配し、一切を御心のままに導いておられたのです。

そしてこの主のみわざと関連しているのが 15 章 31 節で見たダビデの祈りです。ダビデは都落ちを余儀なくされ、泣きながらオリーブ山の坂を登っていた時、アヒトフェルが裏切ってアブサロムの側についた！という知らせを受け取りました。それはダビデに激しいショックを与えずにいなかったニュースだったでしょう。その時、ダビデは主に祈りました。「主よ。どうかアヒトフェルの助言を愚かなものにしてください。」　あの短い祈りが、このようにして聞かれたのです。改めて祈りは何と素晴らしい祝福を祈る者にもたらす手段でしょうか。私たちもあわれみを求めて主に祈るなら、主はどのようにその祈りに応えて、不思議な導きをくださるか分かりません。私たちはこのような主権者を見上げて祈り、その方から最善の時に最善のお答えを頂く幸いへと、この記事を通しても励まされたいのです。

さて今日の章の残りの部分には、主権を持つ主なる神による奇しい導きがさらに二つ短く記されています。一つは 15〜23 節です。フシャイは祭司ツァドクとエブヤタルに伝言し、ダビデに「今夜中にヨルダン川を渡って向こう側へ行くように！」と伝えます。最悪の状況を想定して、一刻も早く逃げるように！とのメッセージです。その連絡を引き継ぐ二人の使者、ヨナタンとアヒマアツが途中で見つかってしまい、アブサロムの家来たちが探しますが、二人はバフリムに住むある人の家でかくまわれます。そうして捜索隊が無事通り過ぎたのを見てダビデに無事に伝言を知らせます。こうしてダビデの一

行は夜が明ける前に全員ヨルダン川を渡り、東側の安全な地域へと出て行くことができました。これも文字としては書かれていませんが、主の奇しい守りの御手によるということを語っている記事でしょう。

この結果としてアヒトフェルの自殺が 23 節に記されます。彼は自分の意見が採用されなかったことに腹を立てたのでしょうか。そうではないと思われます。彼は頭の良い人です。彼は自分の助言が実行されないのを見て、この時点でダビデの勝利を、そして自らの敗北を確信したのでしょう。もはや自分の運命は目に見えている。そこで彼は自ら死を選んだのです。ここにもアヒトフェルが先をクリヤーに見通すことのできた賢い人物であったことが逆に強調されています。

もう一つのエピソードは 24〜29 節です。ダビデはヨルダン川の東側の地、マハナイムに着きます。ここはダビデに対抗したサウル家の生き残りが多く住んでいた地域です。そんな土地でまさかの助け手が与えられます。ショビとマキルとバルジライの 3 人です。28〜29 節にリストされているように、彼らはたくさんのプレゼントを持って来てくれました。これによってダビデの一行は大いなる補給を受けたのです。ここにも主の奇しい守りの御手を見ることができます。支援者が現れることなど想像できないような場所で、神はまさかの備えを用意していてくださった。あり得ない所で、考えられない祝福を恵んで下さった。こうしてダビデは態勢を立て直して、次の 18 章での戦いに備えることができたのです。

以上の箇所から私たちは何を学ぶことができるでしょうか。その一つは、どんなに賢く、有能で、力がある人であっても、主によらなければ、その働きはむなしく終わるということです。アヒトフェルはスーパースターのような人物でした。この道の専門家で、彼にまさる頭脳明晰な人はいません。すべてのカギは彼が握っているかのような状況がありました。しかしこの章が示していることは、人間の間でどんなに賞賛され、また恐れられるような卓越した力と能力を持っている人であっても、主によらなければうまく行かない。彼の最期を見てください！何と悲惨な結末と言うべきでしょう。何と残念な一生の終わり方をしたでしょう。ですから私たちも自分の知恵と力で何でもできるかのように考えてはならないのです。主はいつでもそれをむなしく終わらせ、その人のすべての計画をひっくり返し、無にすることができるのです。その彼と同じ道を行くことがないように！と警告されます。

そして反対に私たちがここから学ぶのは、主権者なる神を仰ぐ慰めです。目の前にいる誰かが主権を持っているのではない。あるいは状況が悪くなって来たら、もう望みは持てないというのではない。主権を持っているのは神です。その方は人間の企みを最善のタイミングでひっくり返すことができる。すぐれた助言を打ち破ることができる。ですから私たちはこの主権者にこそ信頼して、どんな状況でも絶望しないようにしたいと思います。あきらめてしまわないようにしたいと思います。希望を投げ捨てないでいたいと思います。むしろこの真の主権者を見上げて、その方の御言葉に聞き、その方に祈り、その方に従う歩みをささげたい。大切なのはこの真の主権者と私との関係です。自らを振り返り、もしこの方の前に正しい状態にないと思うなら、悔い改め、罪を告白して、赦しを頂きたいと思います。ダビデは罪を告白し、赦された者として、この祝福にあずかりました。そしてこの方に祈る者でありたい。ダビデのあの時の小さな祈りが今日の箇所で豊かに答えられました。そして主に信頼し、主の導きを待ち望んで従う歩みを続けたいと思います。その時、主は私たちの思いもよらない仕方でご自身の最善のご計画を成し遂げてくださいます。脱出の道を備え、助け手を与え、救いの道を歩ませてくださいます。この主なる神の守りと助けを味わい、主を賛美しながら、主に従う幸いな歩みを続けて行きたいと思います。